

特集「金融ビッグバンと情報技術」の発刊によせて

長 島 毅

金融業界においては、大蔵省・法務省の主導のもとに、通称金融ビッグバンと呼ばれる「金融システムの改革」(日本版ビッグバン)が現在進行している。この改革は、

- 21世紀の高齢化社会において、我が国経済の活力維持のためには、1200兆円にも上る個人金融資産がより有利に運用される場が必要である。
- これらの資金を次代を担う成長産業へ供給していくことが重要である。
- 我が国として世界に相応の貢献を果たしていくためには、我が国から世界に円滑な資金供給をしていく必要がある。

との認識のもと、市場の改革と不良債権処理を並行して実現し、我が国の金融市場をニューヨーク、ロンドン並みの国際金融市場として復権させることを目的としている。

その内容は①Free(参入の自由化)、②Fair(ルールの明確化・透明化)、③Global(制度・体制の国際標準への準拠)の3原則を実現するための、銀行金利・証券委託手数料・保険料率など価格の自由化、銀行法・証取法・保険業法などの法改正による業務分野の自由化、銀行窓口での投信販売の解禁や外国為替業務の解禁などによる取扱商品の自由化など、大幅な規制緩和が主たる内容となっているが、BIS(国際決済銀行)による銀行の自己資本率に対する第1次規制、第2次規制、証券市場の決済システムに関するG30(国際経済金融情勢協議会)勧告、企業会計審議会からの企業会計の国際標準への準拠勧告などの規制強化の面がある事も見逃してはならない。

このような急激な金融システム改革によって日本の金融市場は、いふならば開国時代を迎えるといって過言ではない。日本の個人/企業金融資産に向かって、海外から有力な金融機関が新しい金融技術で武装して、次々と参入を始めている。また、総合商社やグローバル企業は企業内銀行機能を構築しコストの圧縮を図ると共に、金融サービス業への参入機会をうかがう。これまで、監督官庁による手厚い許認可制度に守られて各業態毎に棲み分けながら、横並びの経営方針のもとで安定的に成長を続けてきた国内金融機関は、業態や国境を越えた大競争時代の中に身を置くことを余儀なくされたのである。

このような状況の中で生き残りをかけて業界の再編成が進行している。国内・国外の金融機関との合併、業務提携、子会社の設立などを通じて、体質を強化改善し、それぞれのコアビジネスを再定義し、商品・サービスに独自性を持たせた経営形態へ変革する為の試みが進行している。

このような背景のもと、金融機関の屋台骨を支える情報システムに対する要求も大きな変化が見られる。これまでの、事務処理効率化によるコスト削減のツールという守備的な位置付け

から、ネットワーク化、情報活用の強化、経営管理の精緻化、資産運用力・資産運用管理業務・新商品開発力などの競合力を強化する戦略的経営のためのシステムへと進化・統合されていく。

日本ユニシス(株)は、ソリューション・クリエイターの使命として、金融ビッグバンで行われる制度改正や新設制度と金融技術の進歩をキャッチアップした多くの金融ソリューションシステムを市場に供給すると共に、お客様の金融情報システムの改革をお手伝いする為の構築支援サービスを展開している。

本特集号に掲載した論文は、いずれもそのような開発業務とサービス業務の過程から生まれた考察と知見である。それぞれの論文について、本特集の主旨との関連を中心に紹介してみたい。

まず巻頭論文「金融ビッグバンと情報技術」において、金融ビッグバンが起こる背景を金融・資本市場の潮流から分析し、金融機関の情報システムに与える影響を考察する。

次に「インターネット・バンキング」では、インターネット・バンキングという新規のデリバリーチャンネルの上で残高照会・資金移動等が、金融 EDI との連動等利用者側から見てどのように進化していくかを紹介する。

「ビッグバン時代の銀行経営の中核：多段階型トランスファー・プライシング制度」では、金融ビッグバンを契機に多様化する銀行経営の内部管理とマーケティングの基盤として重要視されるようになってきたトランスファー・プライシング（行内資金移転価値）の、銀行経営における位置づけと歴史をレビューし、管理モデル例と業務コンセプト・支援システム機能を解説する。

「Hull White モデルによる債券オプションのプライシング」では、金融商品の多様化の過程で生まれたデリバティブ商品に関してリスク管理のソリューションを提供する中で我々が採用した、HW モデルによるオプション取引プライシングの実用化における、広域探索法やニュートン法などを駆使した解析法を紹介する。

「アメリカン・オプションの理論価格の計算法」では、同じくアメリカン・オプションの理論価格の計算法について Semi implicit 差分法と PSOR 法を組み合わせた新手法に関する基礎研究の成果を紹介する。

金融ビッグバン時代を勝ち抜くためには、近代的な IT 技術の導入による情報システム開発力の強化が必須である。「オブジェクト指向技術による勘定系システムのリエンジニアリング」では、オブジェクト指向技術による分析・設計結果の COBOL による実装構造と、勘定系システムのリエンジニアリングの方法について記述する。また、「SBI 21 におけるオープン環境を利用した開発基盤」では、次期勘定系ソリューション SBI 21 の開発において実現されている PC 上の Windows/NT による、単体テストに重点を置いた、上流から下流までのシームレスな開発環境について解説する。

ビッグバン時代のコアビジネスとして、リテールバンキングの重要性が再確認されつつある。これを支える技術として、顧客情報の有機化がある。「BRaMS による顧客情報の活用事例」では、顧客情報を中核とした情報系システム構築に活用されている BRaMS を、顧客データベースの考え方とその活用事例を中心に紹介する。また、「ミッションクリティカル・データウェアハウス “CRMS 21”」では、日本ユニシスが戦略的顧客情報管理システムとして提供する、CRMS 21 の設計思想とシステム構造を解説し、これを適用したマーケティング・プロセス

を紹介し、リレーションシップ・マーケティングの有効性について述べる。

「オープン環境における入出力の部品化と標準化」では、大競争時代のソリューション開発において、最重要課題である生産性向上を目的に開発した、使用者インタフェース部品・標準化規約・リポジトリとツールからなる金融ソリューション開発基盤 SWEETS の成果を、最新の技術動向からの評価を交えて紹介する。

本特集を通じて、金融ビッグバンという激動の波を乗り切っていただくために、より良い金融ソリューションを提供するとともに、お客様の戦略的情報システム構築をお手伝いして行きたいという、日本ユニシスの取り組み姿勢の一端をご理解頂ければ幸いです。

(ビジネスソリューション四部長)